

◆KM/BI 教育・研究の躍進—第44回システム科学国際会議に参加して

報告者: 青山学院大学名誉教授 KM 学会理事 石川 昭

(日本 BI 協会顧問/日本危機管理学会名誉会長)

1. はじめに

一昨年のメルマガで「第42回システム科学国際会議に出席して」と題して会議内容を紹介した(注1)が、その中で、システム科学の捉え方や特徴、Knowledge Management 部会の概要、更には、隣接知識分野の部会の概観などについて触れた。

本年1月5日から8日までの第44回目の会議は、今回はカワイ島にある Grand Hyatt Kauai で開催され、40カ国以上から700人を超える参加者があった。小生は、2-3年前、ハワイ大学で講演に招待されたり、Executive MBA の学生が日本に来訪した折、セブン・イレブン本社(当時)で講義を実施したお礼の意味や本国際会議第一回からの参加者ということもあって、今回は参加料を免除された招待者のようなかたちで参加することになった。

以下、KM や関連する知識領域に焦点をあわせて、内容の一部を報告したい。

注1. 「第42回システム科学国際会議に出席して」の原稿が掲載されているメルマガは 2009年2月17日発行の No. 21 で以下の URL にあります。ご参考にしてください(編集者)
<http://kms-j.sakura.ne.jp/mm/2010/08/no212009217.html>

2. 本国際会議の概要

この前の拙稿で、Proceedings のページ数、論文発表者数、2名以上のブラインドレフリー制度に参加する査読者数などを紹介したので反復記述は避けるが、Proceedings の総ページ数は、今や100,000ページを越え、IEEE Computer Society から刊行されている。

第44回大会では、第1日目の Symposia, Workshops, and Tutorials は24を越えた。Symposia には、KM に関連するものとして、Determining the Value of Knowledge Based Initiatives, Cloud and Grid Computing Services: The Next Generation of Software-as-a-Service, Workshops としては、Social Network Analysis, Wireless Cities: Ubiquitous Computing and Web-based Services in an Urban Development, ERP Research Stream Perspectives, さらに Tutorials としては、Introduction to Social Network Analysis Concepts and Methods, Financial Valuation of Information Technology in a Distressed Economy, および Emergency Management Information Systems などが含まれる。

その他、例年通り基調講演や特別招待講演などがあり、MIT Media Lab Director の Cynthia Brezeal による「ロボット技術の社会的側面」と題する基調講演や、クリントン大統領時代に大統領の情報技術に関するアドバイザーリーコミッティの委員を勤めた Larry

Smarr 博士から、「Building a High Performance Global Collaboration System for Data-Intensive Discovery」というタイトルの特別講演のほかに、Best Paper Award Ceremony が開催され、10の部会長から夫々の分野の最優秀発表論文が表彰された。

以前の拙稿で、日本からの参加者が極めて少ないことを指摘したが、本年もその域を脱してはいないものの、Digital Media: Content and Communication 部会で最終日に、京都大学 Global COE プログラムの主催によるパネル討論会が開催されたのは救いであった。10の部会については、以前の拙稿で紹介したので反復はせずに、以下、Knowledge Management 部会や隣接領域の部会の状況、更には話題性のある内容に触れていきたい。

3. Knowledge Management/Business Intelligence 関連部会の概要

2009年度の大会では、KMの分野については、5つの分科会が編成されたことを報告したが、今年度は何と、2倍以上の12の独立した分科会(表題名からは6つ)による発表が行われた。それらは、

1. KM in a Changing Society: Using Knowledge to Impact Societies (1)
2. KM in a Changing Society (2)
3. Knowledge and Innovation Systems (1)
4. Knowledge and Innovation Systems (2)
5. Knowledge Flows, Transfer, Sharing and Exchange in Organizations (1)
6. Knowledge Flows (2)
7. Knowledge Flows (3)
8. Knowledge Management Value Success and Performance Measurements (1)
9. Knowledge Management Value Success (2)
10. Knowledge Intensive Business Processes
11. Web 2.0/3.0 Technologies, Mashups, KM Tools, and Design Approaches (1)
12. WEB 2.0/3.0 Technologies (2)

である。但し、非常に広範囲を受け持つ、Organizational Systems and Technology 部会の中には、KM 関連の分科会が多数設けられている。特に、Business Intelligence は、KM と密接な関係があり、例えば、同部会の中の、BI, Data Warehousing, and Process Analytics 分科会、Business Process Management 分科会、Communication Networks 分科会、Competitive Strategy, Economics, and Information Systems 分科会、Enterprise System Integration: Issues and Answers 分科会、Information Issues in Supply Chain and in Service System Design 分科会、さらには、Intelligent Decision Support for Logistics and Supply Chain Management 分科会など幾つかピックアップしても、いずれも、Knowledge Management 部会の中に設けてもいいような分科会である。

特に、BI, Data Warehousing, and Process Analytics 分科会のなかで、バージニア大

学の Barbara Wixom とアリゾナ州立大学の Mike Goul が、「Educating the Next Generation BI/Advanced Analytics Workforce」と題して発表した内容の一部を、要約的に紹介しておきたい。

現在、Teradata University Network は、大学と産業界の橋渡しをしており、80カ国の1200の大学に本ネットワークに登録した2300人のファカルティ（大学教職員）を擁している。その目的は、政府や企業により優れたナレッジワーカーを供給することにある。

がートナー社が刊行した2010年11月25日の研究報告書によると、2012年には、新しい趨勢として、第1に、携帯やタブレット機器が BI のプラットフォームに変わっていく事、第2に、Advanced Analytics が急成長していくと予測されること、第3に、サービスプロバイダーが、BI と Analytics Solution を広く提供していくこと、そして第4に、BI と Analytics により、益々統合的意思決定環境が形成されていくこと、を掲げている。

そして、Teradata は、産業界と大学とのパートナーシップのソリューションとして、Sloan Management Review, Summer 2010 に掲載された、Pertuze, Calder, Greitzer and Lucas の “Best Practices for Industry/University Collaboration” のコラボレーション成功の鍵である以下の7つの要諦を引用している。

1. 選択過程の重要な一部として、プロジェクトの戦略内容、特に期待されるアウトプットを明確にする。
2. 境界領域を跨るプロジェクトマネージャーを夫々の分野の技術に関する深い知識、機能的、組織的境界を結合するネットワークの構築、製品研究と利益とを結合させる能力の3点に立脚して選抜する。
3. 大学チームとは、コラボレーションが産業界あるいは特定企業への貢献度についての具体的ビジョンを共有する。
4. 長期的関係を維持、発展させる。
5. 両者の中の強いコミュニケーションの輪を時間をかけて確立する。
6. 社内、特に機能的に異なった領域に対して、プロジェクトの重要性を認知させると共に、大学チームに対して社内の要求事項を充分理解させる。
7. 一定の研究成果が出るまで、契約の前後を通じ、技術的、組織的に最高の支援体制を維持する。

尚、Teradata University Network では、Data Warehousing, DSS(Decision Support System)/Business Intelligence, およびデータベースの分野を教える世界中の大学教職員に無料のオンライン資料を提供していくことを公表している。

当然のことながら、このネットワークに登録されれば、コースのシラバス、関連論文、ケース、プロジェクト、宿題、プレゼンテーション資料、Teradata, Microstrategy などの

ソフトウェア、データセット、ウェブセミナーなどにアクセスすることができる。

更に、コンパニオンセットとして、**Teradata Student Network** があり、学生は、ソフトウェア、教科書、参考論文、研究報告書、ケース、プロジェクト、宿題（解答削除）、**Teradata Library** や関連サイトへのアクセスなどを利用することができる。

2010年12月11日と12日には、セントルイスで、**SIGDSS** や **University Network** 共催で **BI Congress 2010** が開催された。この Congress には、**IBM, SAS, Deloitte, Baseline Consulting, University of Virginia, Loyola University** などがスポンサーになっている。

尚、近日中に、” **The State of BI in Academia in 2010**” が刊行される予定であるので、機会をみて、その内容もご紹介したいと思う。

4. おわりに

今回は、狭義の **Knowledge Management** 部会だけでなく、隣接領域である **Business Intelligence** なども含めて国際会議の内容の一部を紹介した。本会議では、**KM/BI/DSS** というように、**Decision Support System** をも含んだ3領域を総括して表示したセッションもあった。

発展をして止まない **KM** 領域であるだけに、私たちが弾力的に本領域に向き合っていく事が必要と思われる。勿論、**KM** を更に深掘りしていくことは必要であるが、それと共に隣接領域を融合し、更なる発展を図っていく努力も軽視してはならない。

その意味で、特に今回ご紹介した米国において産学コラボレーションの新しいかたちとして発展してきている **Teradata University Network** のモデルは、**BI** が主対象となつてはいるものの、**KM** の分野を主体とするこのような運動を **KM** 学会ができないという理由はなく、今後おおいに検討の余地を残していると痛感した今回の国際会議参加の印象であった。（2011年2月1日記）